

第3節 長原遺跡の土器埋納遺構－飛鳥～平安時代－

これまでの長原遺跡の調査・研究により、古代から中世にかけての土器編年が整いつつある[鈴木秀典1982・佐藤隆1992]。そこで、ここでは飛鳥～平安時代にかけての土器埋納遺構を取上げ、土器のものとさしてその変遷をたどってみることにする。それによって、土器埋納遺構を理解する上での新たな視点を示したい。

1) 土器埋納遺構の捉え方

「土器埋納遺構」という用語は、性格不明の遺構から完形の土器が出土しているばあいには用いられていることが多い。しかし、土器を埋納するという行為は、井戸や墓のように、遺構の種類がわかる事例にも確認することができる。ここではその行為に重点を置いて、これらの遺構も含めて見ていくこととする(註1)。まず、本論における土器埋納遺構を次のように規定する。

- 1、完形またはそれに近い土器がある。
- 2、土器に意図的な配置が認められる。
- 3、人為的に埋められることなどによって、外部から遮断される(人の手に触れない状態となる)。

1については、出土する土器の中には穿孔や口縁部の打欠きのみられるものがあり、完形品に限定できない。また、今回は未確認であるが、土器を意図的に破碎した上で埋めるというケースも考えられる。土器がある対象への供献品であるならば、その再利用を防ぐ意味で、土器の破碎が埋納に先行して行われることもあったであろう。こうしたばあいは、2・3の状況が明確に看取されるときのみを埋納と捉える。2については、複数の土器を重ねたり、組合せたりしていれば、明らかに意図的なものと判断することができる。しかし、完形品が単独であるばあいや、複数であっても意図して配置されたとは呼びにくいばあいもある。こうしたときの判断方法として、同様な状況を示す遺構が群として周辺に存在するか、また、器種の選択がみられるか、といった見方ができる。ピット中央に土師器杯が1点だけみられるという遺構が飛鳥時代に多くあり、こうしたピットは群在する傾向があることから埋納と認定できる。また、同一器種ばかりが出土するばあいは、そこに器種選択という点において行為者の意図がはたらいていると考えるべきであろう。3に外部

から遮断される、としたのは、埋められる土器の中には井戸側や土管・貯蔵容器などのように埋設状態で使用されるものがあり、これらを排除するためである(註2)。

土器を埋めるという行為には大別すると供献・埋設・貯蔵・廃棄のうちいずれかの目的があったと考えてよいであろう。その中で埋納と捉えるものは供献・埋設または貯蔵という意図のもとに埋められたものを指すことになる(註3)。廃棄されたばあい、上記1・2を満たさない。また、埋設された土器のうち、3に該当しなければ、埋納とは呼べない。以上のことを確認し、次に分類に入ろう。

今回、土器埋納遺構としたものには、井戸や墓といった遺構の性格の明らかなものも含まれるが、まずはその概念を取り払って、新たな枠組みを設けたい(図239)。

遺構の規模・形状と埋納する土器との関係から、まず2大別できる。土器を埋納するに足るだけの規模の遺構と、土器の埋納だけを目的としないと考えられるものとである。後者のばあい、土器は遺構の一隅にかため置かれることが多い。また、井戸側内に埋納されたと判断されるばあいも、その遺構は土器を埋めるためのものではないから、後者に含まれる。以下、これをC類型

型とする。前者はさらに二分されて、蓋と身からなる密閉型のB類型と、皿や碗などを積み重ねたり、並べ置いた開放型のA類型とに分れる。

井戸を除くその他の遺構について、その規模と各類型との相関関係をみた(図238)。まずA類型をみると、長軸方向の長さが30~140cmにあって、かなりの開きをもつが、40cm前後にややまとまりをもつ。遺構の長軸が70cmを越える規模のものは、

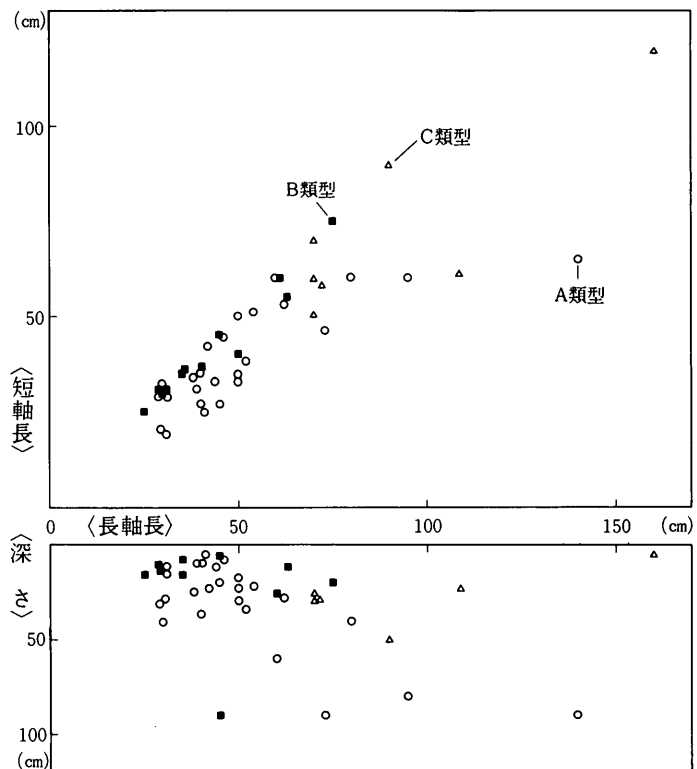


図238 類型別遺構規模の比較

土器だけの埋納を目的としたと考えるにはやや大きいように思われるが、それらは比較的深めに掘られており、そのため大きめの平面プランとなったのであろう。多くは深さ20cm前後に集中している。B類型は密閉型の容器である。そのため、遺構の平面形もそれに合わせてやや小ぶりで、長軸長と短軸長の差がほとんどないものが多い。深さは20cm弱に集まっているが、遺構の上部を侵食されている例があるため、その傾向はつかみにくい。1例だけ、90cmもの深さをもつが、実際に土器が埋納されているのは、その中位以上である。土器以外の埋納をも想定されるC類型は、A・B類型に比べてやはり平面規模で卓越しているが、深さではあまり変らない。

以上から、A～C類型は遺構の規模の比較からもそれぞれの特性をうかがうことができるものといえる。また、A・B類型は墳底面が狭く、断面形が逆台形になるものが多いが、C類型は墳底が広くて平坦になっていることがいえる。

2)各類型の内容

A類型

土器の配置状況は開放型で、土器を埋納するに足るだけの規模の遺構である。今回42件を確認し、全体の5割を占める。この類型の内容は、以下の2つに分けて説明する。

まず、A類型1式(以下A1式と略す)は1、2点の杯や碗などを埋納し、正位かそれに近い配置が確認されるもの、すなわち、土器になんらかの供物を入れていたことも想定できるものである(供膳型)。この一群には平面規模の割に深いものがあり、また、多数の同形態の遺構が密集して検出されたりする。NG92-9次調査SP701は須恵器杯蓋を埋納したピットであったが、柱痕跡が確認されており、その他のA1式とは性格が異なることも考えられる。A2式は複数の皿・小皿を埋納することが多く、それらは積み重ねられたり、逆位にされたりしている。よって、供膳型に対し収納型といえる。A1式は34件、A2式は8件ある。A1式は飛鳥Ⅰ・Ⅱの時期に数多く見つかっているが、それ以降激減し、平安時代Ⅲ期まで続く(註4)。飛鳥の土師器杯には口縁部を意図的に打ち欠いたものがあり、平安Ⅲの例では黒色土器碗の口縁部に小孔を穿ったものもある。A2式は平安Ⅱから平安Ⅳまでの間にみられる。平安Ⅱの例では3～6点の皿を並べたり、重ねたりしているが、平安Ⅳでは11～29点の皿をピット内に詰め込んでいるような状況がみられる。

B類型

蓋と身で構成される密閉型で、それが納まる程度の規模のものである。今回は19件確認

表18 長原遺跡の土器埋納遺構（飛鳥～平安時代）

報告書・調査名	遺構名	時期	規模	土器種類	分類	備考
調査会1978	31工区SK07	飛鳥	直径60×60	土師器杯	A1	
センター1978	古墓	平安Ⅰ	直径30	土師器甕・皿	B2垂	2基確認
	SB001柱穴	平安Ⅲ		土師器甕	B3	掘形一隅に正位で置く
	SE101	平安Ⅲ		黒色土器碗、土師器碗・小皿	C2	曲物井戸
	SE113	平安Ⅳ新		瓦器碗・土師器小皿	C2	曲物井戸
センター1985	ビット1	平安Ⅰ	70×60×25	土師器碗・小皿	C1	掘立柱建物2と関連
	井戸1	平安Ⅳ新		瓦器碗・小皿	C2	曲物井戸、埋土最下層
協会1982	P5	飛鳥Ⅰ	54×51×22	土師器杯	A1	
	P12	飛鳥Ⅰ	50×33×23	土師器杯	A1	
	P13	飛鳥？	50×34×18		A1	
	P14	飛鳥Ⅰ	44×33×12	土師器杯	A1	
	P31	飛鳥Ⅰ	直径42×23	須恵器杯蓋・土師器杯	A1	
	P39	飛鳥Ⅰ	52×38×34	土師器杯	A1	
	P46	飛鳥Ⅱ	40×35×37	土師器杯	A1	
	P50	飛鳥Ⅰ	39×31×10	土師器杯	A1	
	P56	飛鳥Ⅰ	40×27×10	土師器杯	A1	
	SK462	飛鳥Ⅰ	46×73×90	須恵器杯身・土師器鉢	A1	
	火葬墓301	平安Ⅲ	直径75×20	土師器甕・小皿	B2垂	甕を合口にする
	火葬墓302	平安Ⅲ	63×55×12	土師器甕・碗	B2	甕逆位
	火葬墓303	平安Ⅰ？	直径45×7	須恵器短頸壺	B2垂	壺逆位
	火葬墓304	平安Ⅲ	直径30×11	土師器甕・小皿	B2垂	甕逆位、内部に小皿
	SE307	平安Ⅳ新		瓦器碗	C2	曲物井戸、碗4点以上
協会1983	火葬墓401	平安Ⅲ	直径35×8	土師器甕・小皿	B3	甕正位、内部に小皿
	火葬墓402	平安Ⅲ	不明	土師器甕・杯	B2	甕逆位
	ビット408	平安Ⅳ新	70×50×30	瓦器碗	C1	
	ビット409	平安Ⅲ	直径100×60	土師器羽釜	—	大和型の羽釜、井戸側？
	ビット415	平安Ⅳ新	直径90×50	瓦器碗	C1	
	ビット416	平安Ⅳ新	直径70×30	瓦器碗	C1	
協会1989	SX401	平安Ⅳ古	160×120×5	土師器皿・小皿	C1	埋土に骨片・炭・灰
	SX402	平安Ⅳ新	直径50×30	土師器小皿	A2	完形29点
協会1992a	西地区SP01	平安Ⅲ	直径30×15	黒色土器碗・土師器碗	B1垂	
	西地区SP02	平安Ⅲ	直径35×17	土師器甕	B1	正位
	西地区SP03	平安Ⅲ	直径25×16	土師器甕	B1	正位
	西地区SP04	平安Ⅳ		土師器皿	A2	
	西地区SK08	平安Ⅲ	109×61×23	土師器小皿	C1	SB14に関連
	西地区SE03	平安Ⅲ		黒色土器碗	C2	曲物と板材の井戸
協会1992c	南Ⅱ区SP123	平安Ⅱ	45×27×20	土師器碗	A2	逆位に重なる
	南Ⅱ区SP149	平安Ⅱ	45×45×7	土師器碗	A2	並べ置く
	南Ⅱ区SP415	平安Ⅲ	72×58×	土師器皿	C1	一隅にかためる
	南Ⅰ区SE003	平安Ⅲ新		土師器皿	C2	曲物井戸
	南Ⅱ区SE001	平城宮Ⅲ～Ⅴ		土師器碗	C2	丸太刳抜き井戸、土馬伴う
	南Ⅱ区SE002	平安Ⅳ新		瓦器碗	C2	曲物井戸
	南Ⅳ区SK001	飛鳥Ⅰ	130×80×	土師器杯	A1	
協会1993	東南地区SK01	飛鳥Ⅰ	95×60×80	土師器杯	A1	付近にSK02・03
	土器埋納遺構	平安Ⅲ	50×40×	土師器甕・皿	B1	甕正位
本書	中央地区SK27	平安Ⅲ	直径60×25	土師器甕・皿	B2	甕逆位
	土器埋納遺構1	平安Ⅲ	不明	土師器碗・皿	B1垂	
	土器埋納遺構2	平安Ⅲ	不明	土師器鉢	B1垂	鉢を合口にする

第Ⅲ章 遺構と遺物の検討

	中央地区SK26	平安Ⅲ	直径60×30	土師器小皿	A1	SD02に関連？
	東南地区SP29	平安Ⅳ	41×25×5	土師器小皿	A2	重ね置く
	東南地区SP10	平安Ⅲ	直径30×40	黒色土器碗・土師器皿	A1	正位で重ねる、SB01に伴う
	東南地区SP19	平安Ⅲ	30×20×30	黒色土器碗	A1	正位、SB03に伴う？
	中央地区SE02	平安Ⅱ		土師器甕・碗	C2	曲物井戸
	東南地区SE02	平安Ⅲ		黒色土器碗	C2	素掘り井戸、碗5点
NG80-3次	P451	飛鳥		土師器杯	A1	
NG81-12次		平安Ⅲ？		土師器甕・壺	B3	小型壺を蓋とする
NG82-41次	土器埋納ビット	飛鳥Ⅰ		土師器杯・須恵器杯	A1	5基検出
NG88-1次	SK01	平城宮Ⅰ	80×60×40	土師器杯・須恵器杯	A1	条里溝付近
NG88-4次	SP01	飛鳥	62×53×28		A1	
NG88-19次	SP02	平安Ⅳ		土師器小皿	A2	小皿11枚
	SP08	平安Ⅳ	直径30×13	土師器小皿	A2	小皿11枚
	SP09	平安Ⅳ		土師器小皿・皿	A2	小皿22枚・皿2枚
NG88-36次	P-01	平安	直径30×15	土師器碗	A1	
NG88-59次	SP01	飛鳥	30×20×30	土師器杯	A1	
NG89-47次	SK403	平安Ⅳ新		瓦器碗	C1	碗逆位、口縁部に穿孔
NG90-5次	SP02	平安	40×35×90	土師器甕	B3	甕は正位、掘形中位に置く
NG91-1次	SK7C01	飛鳥		土師器小壺	A1	
	SK7C02	飛鳥		土師器杯	A1	
	SK7E01	飛鳥		土師器杯	A1	2基の土壙が重複
	SK7E02	飛鳥		須恵器杯	A1	
	SK7E13	飛鳥	140×65×90	土師器杯	A1	ウリ種子多数
NG91-30次	蔵骨器	平安Ⅲ		須恵器壺・土師器皿・杯	B3？	洪水に流され、原位置不明
NG92-2次	SE02	平安Ⅳ		土師器小皿	C2	正位に置く
	SE03	平安Ⅳ		土師器小皿	C2	正位に置く
NG92-5次	SK78	飛鳥Ⅱ・Ⅲ		土師器杯	A1	
NG92-9次	SP701	飛鳥Ⅰ	38×34×25	須恵器杯蓋	A1	柱痕あり
NG92-24次	ビット	飛鳥～奈良		須恵器	A1	

* 規模の単位はcm、また、井戸については規模を省略した。

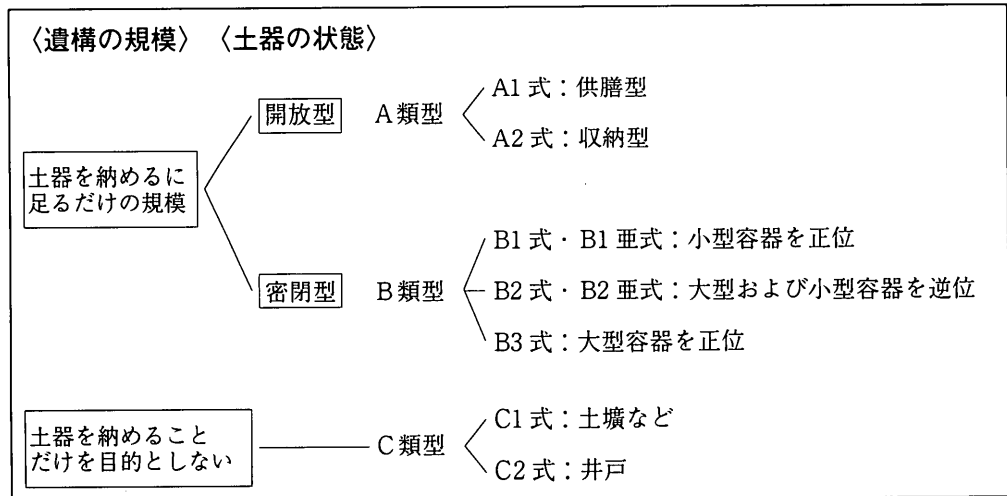


図239 土器埋納遺構の分類基準

し、全体の1/4に当る。その形状から、土器自体が埋納の主体ではなく、土器の内容物に意味があったと考えられ、B類型においては内容物の問題が重要な課題となる。したがって、身として使用されている土器がどういうものが第1の注目点、続いて、内容物が固体なら土器の向きは問われないが、液体または液状のものであったならば口縁を水平に据える必要があり、身が正位か逆位であるかが第2の注目点となる。

身としてもっとも多く用いられているのは、体部が球形を呈する土師器甕(口径15~28cm、器高20cm前後)で10例。次に多いのは、前述のものより小さい土師器甕(口径13cm前後、高さ13cm前後)で4例ある。その他は須恵器壺2例、黒色土器碗1例、土師器碗1例、土師器鉢1例となっている。

小さい土師器甕を用いた4例のうち3例は、甕がちょうど納まるほどの小穴に、土器を正位に納めるという点で共通している。うち1例は土師器皿を逆位に使って蓋とする。これらは共通する意図で埋納されたと考えられることから、その他とは区別してB1式と呼ぶ。このB1式と容量の上で近似するものに、黒色土器碗や土師器碗・鉢を使ったものがあり、液体を入れるにも可能な配置が行われている。これらにもB1式と同様な用途が考えられ、B1亜式とする。

体部球形の大型の土師器甕は正位または逆位に用いられている。逆位になるもののうち3例は、その蓋として土師器の杯や皿を入れ子に使い、身にはめ込むような格好で組合せている。身の内部に土師器小皿を埋納するものもある。こうした構造をとるものをB2式とする。逆位になるその他のものには土師器の小型甕や皿を合口に用いて蓋としているものがあり、これらはB2亜式とする。また、身として使用する容器が小型の甕や須恵器の壺であるものも、B2亜式に含める。身を正位に置くものは4例あるが、これらはB3式とする。

以上、B類型の内容として、B1式・B2式のようにそれぞれの目的に応じて一定の埋納形態が存在したと思われること、すなわち、ある種の作法があって、それに則って埋納という行為が行われていたと考えられるものがある。そしてまた、それぞれに類する埋納形態が存在し、双方の特徴を備えたB3式があるというB類型の実態が見えてくる。

B類型は今のところ平安時代にみられるのみで、そのほとんどが平安Ⅲに集中している。B2亜式には平安Ⅰに該当するものがある。

内容物がわかるものとして、洪水層から出土し、原位置を留めない須恵器壺が1点あり、中から多量の骨片・灰が出土している。また、壺内には土師器杯・皿も納められていた(NG91-30次調査)。内部に土師器の皿を埋納する例が多く、それは次の通りである。

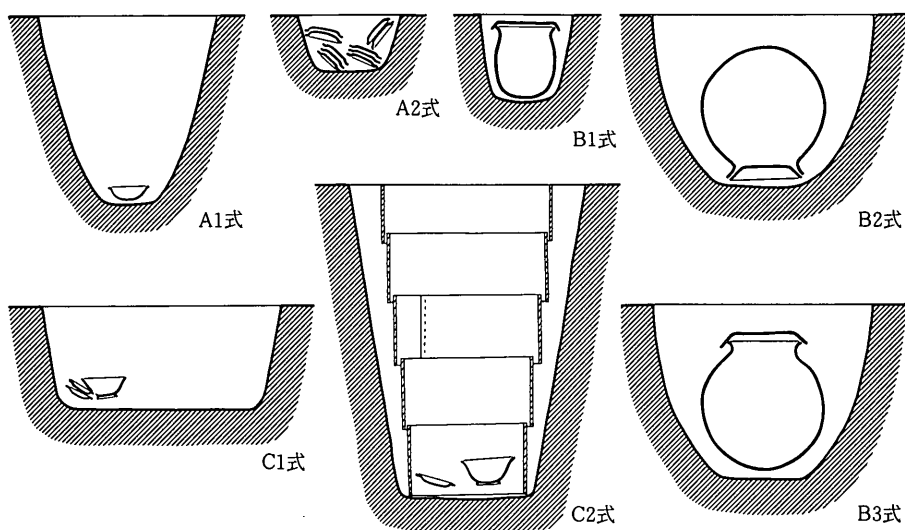


図240 各類の基本モデル

2枚：B2 亜式・B3 式、2枚以上：B2 式・B3 式、5枚：B2 式・B2 亜式

C 類型

遺構が土器の埋納だけを目的として掘られたものでないばあいである。20件あり、全体の1/4を占める。埋納された土器は遺構の片隅に置かれるほか、井戸底に置かれるといった状況で見つかる。そこで、土壙・ピットにおけるものをC1式とし、井戸で行われる土器埋納をC2式と呼び分ける。

C1式は平安Ⅰ～Ⅳの間に該当するものがあるが、その間の平安Ⅱに当るものは今のところ未確認である。平安Ⅰ・Ⅲにあっては土師器皿を数点埋納する例がめだつが、平安Ⅳの時期には瓦器碗1点を埋納するという例が多くみられる。土壙の長軸方向と隣接する掘立柱建物の棟方向が揃う例がいくつかみられ、両者の関連が推測されるものもある。土器以外のものが同時に見つっている例が1例あり、そこでは骨片や焼けた板材が出土している[大阪市文化財協会1989]。

C2式は奈良～平安時代の遺構が知られる。奈良時代の例では土師器碗とともに土馬も出土している[大阪市文化財協会1992c]。平安Ⅱの例には土師器の甕・碗、平安Ⅲでは黒色土器碗を納めるものがある。平安Ⅳでは瓦器碗や土師器皿を入れるものが多くなる。

3) 各類型の分布状況

これまで見てきた各埋納遺構の内容から、B類型が現われる平安Ⅰの時期、そしてB類型が突如みられなくなる平安Ⅳの時期に大きな画期があることがうかがえる。そこで、飛

鳥～奈良時代、平安Ⅰ～Ⅲ、平安Ⅳに分けて分布状況を見ることにする。

飛鳥～奈良時代

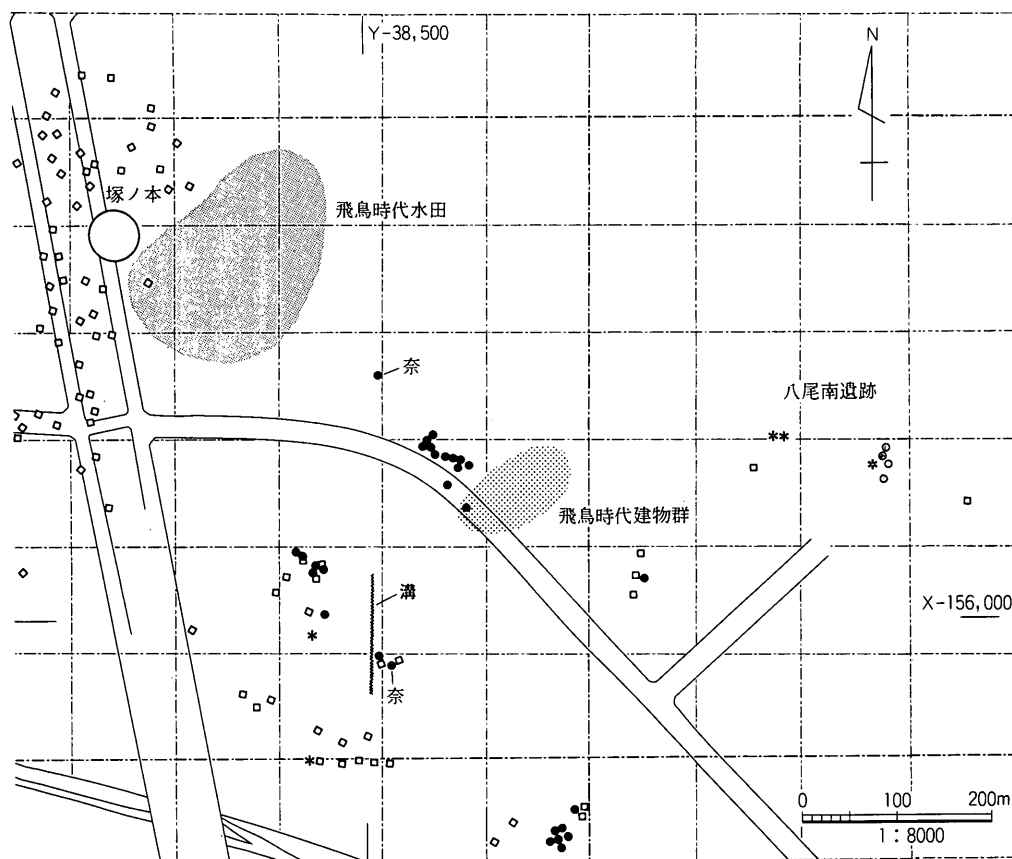
A1 式が長原遺跡の東南地区に確認されている。飛鳥Ⅰ・Ⅱのものは多数の遺構がやや密集した状況でみられ、それらがいくつかのかたまりを作っている。この状況は東接する八尾南遺跡においても確認される[八尾南遺跡調査会1981、八尾市文化財調査研究会1987]。しかし、奈良時代には極端に少なくなり、その分布のしかたも異なっている。図241中央下部に奈良時代の南北溝があり、奈良時代の埋納遺構はこの溝付近に点在するかたちをとる。溝の位置はのちの推定条里線とも近い場所にあり、約250m北に位置する調査地においては下幅1.3mの大畦畔が確認されている(註5)。このことから、奈良時代の重要な区画線であったことはまちがいがなく、土器埋納はそれを意識して行われたと考えられる。

では、その他の土器埋納遺構の分布は何によるものであろうか。この地区の古墳や方形周溝墓の分布と重ねてみると相似た傾向を示すことがうかがえる。図に*印が5箇所あるが、これは古墳時代の須恵器を埋納したピットの位置である。ピットの規模や土器の埋納の仕方は飛鳥時代のもと同様である。これは、古墳時代にすでに飛鳥時代と変わらない土器埋納行為が行われていたことを示すものであろうか。長原の古墳は遺跡のほぼ全域に分布しているが、こうした埋納遺構はこの地区に集中している(註6)。また、埋納されている土器も、埋められる直前まで使用されていたものが埋納されたにしては風化の度合いが著しい。さらに、八尾南遺跡では古墳時代の土器を入れるものと飛鳥時代の土器を入れるものが近接して見つかっている。すると、これらには古墳時代の土器を使った飛鳥時代の埋納遺構という可能性も出てくる。仮に飛鳥時代のものとする、A1 式の分布と古墳・方形周溝墓の分布はより密接なものとなる。

図の中央部に飛鳥時代の建物群があり、その北西に埋納遺構が密集している。この付近には古墳や方形周溝墓は確認されていないが、建物群からみてその方向には長原古墳群でもっとも古墳が集中する範囲があり、盟主墳である塚ノ本古墳が存在する。また、飛鳥時代の水田が見つまっているのも建物群からみてこの方向に当る。さらに、図示してはいないが、長原中央地区にある高廻り2号墳付近にも飛鳥Ⅰの土師器を埋納する遺構(南Ⅳ区SK001)が確認されている。こうしたことから、飛鳥時代のA1 式については、水田や前時代の墳墓との関連をもって分布しているといえよう。

平安Ⅰ～Ⅲ

この時期、建物群は長原遺跡の広範囲に散在する傾向がみられ、土器埋納遺構の分布も



凡例 ● A1式(奈：奈良時代) * 古墳時代の土器の埋納 □ 古墳・方形周溝墓

図241 飛鳥～奈良時代の土器埋納遺構(長原遺跡東南地区・八尾南遺跡)

それに呼応している。A1式・A2式は、推定条里線付近または建物群の周辺に存在する。平安Ⅲの区画溝が数個所で見つかったが、それらは推定条里線と合っており、この時期には条里地割が広範囲に行きわたっていたことが推測される。

B1式・B1亜式も推定条里線に近い所に存在するが、それよりも建物群が見つかった。ひとつの坪内にあって、建物の分布するその外縁に多く存在するよう見受けられる。長原遺跡西地区では建物群を取囲む溝の外側にB1式の遺構が検出されている(図243)。

B2式・B2亜式・B3式は図242の中央付近にややまとまってみられるほか、建物群が見つかったところに点在している。B2式とB2亜式は近接して存在しており、B3式もそれらと近い場所にある。

井戸における土器埋納であるC2式が建物群の分布と重なるのは当然のことであるが、C1式の土壌・ピットについても、これまでのところ建物群とともに存在する傾向がある。

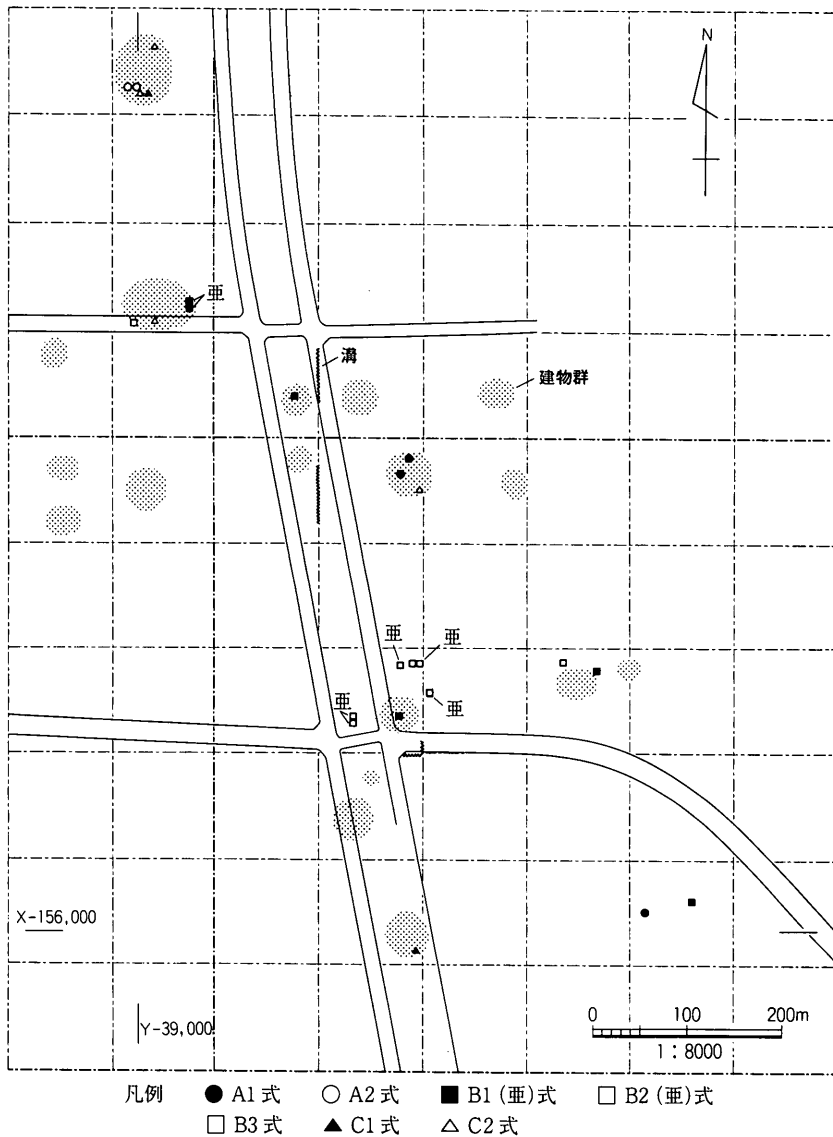
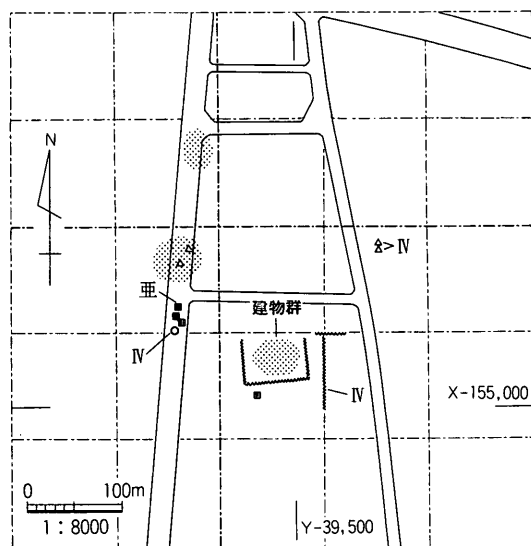


図242 平安時代Ⅰ～Ⅲ期の土器埋納遺構(長原遺跡東南地区付近)

平安Ⅳ

平安Ⅲの建物群の分布状況から打って変って、長原遺跡の東南地区と南地区が接する辺りに建物群が集中するようになる(図244)。鎌倉時代の初め、建物群の北端部に一町四方の区画に則った溝が巡らされる。この溝が平安Ⅳにまでさかのぼれるかは確証はないが、建物群の集中と溝の掘削は共通の要因によるものと思われ、溝の時期はさかのぼることも考えられる。



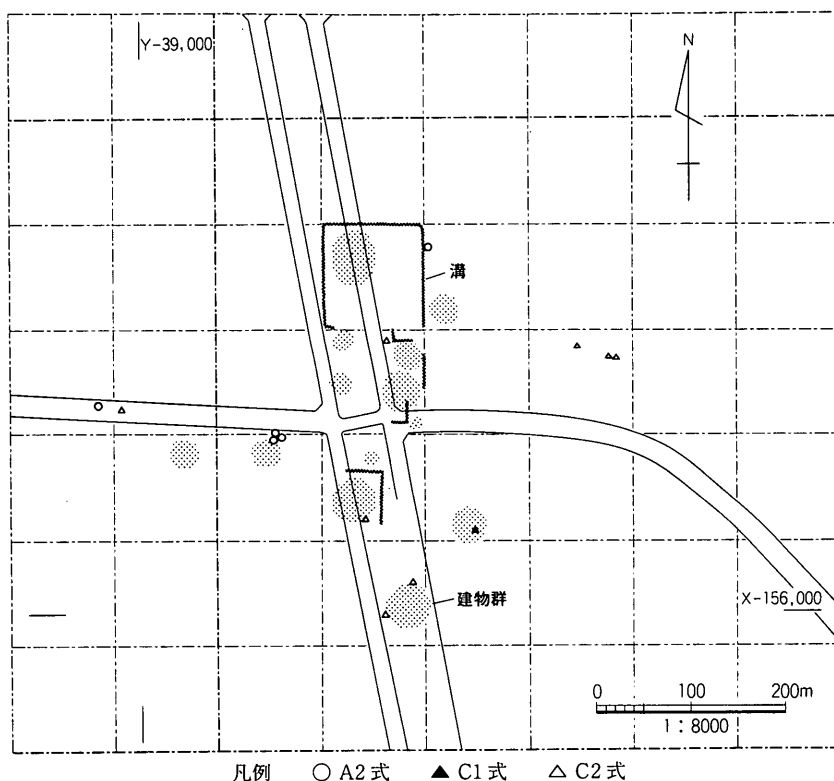
凡例 ○ A2 式 ■ B1 (亜) 式 ▲ C1 式
△ C2 式 IV : 平安時代Ⅳ期

図243 平安時代Ⅰ～Ⅳ期の土器埋納遺構
(長原遺跡西地区)

A2 式はみな推定条里線付近にみられる。C1 式は、平安Ⅲまでのように建物群と同じ場所に見つかるものと、建物群の範囲から離れて分布するものとがみられる。C2 式はやはり、建物群とともに存在する。平安Ⅲまでは建物群とともにあったC 類型のうち、C1 式だけがそこから分離していることに注目したい。

4) 埋納の目的

飛鳥～平安時代の土器埋納遺構に2つの画期を考え、それぞれの時期の遺構の分布状況をみてきた。その中で、同類に



凡例 ○ A2 式 ▲ C1 式 △ C2 式

図244 平安時代Ⅳ期の土器埋納遺構(長原遺跡東南地区付近)

分類したものが、時期ごとに分布状況を変化させていることがうかがえ、それぞれのもつ意味の変容が推測された。また、異なる類型どうしでは、やはり分布の仕方にも違いがみられ、それは埋納の目的が異なっていたためと考えられる。各類型ごとその目的について考察しよう。

A類型

次に述べるB類型とは異なり、納められる土器どうしを組合せて容器をかたち作るものではないことから、土器は埋設されたものではないであろう。また、1、2点の土器を貯蔵したとも思われないことから、主として供献を目的としたものと考えられる。では、一体何のための供献であろうか。

A1式は飛鳥時代、特に飛鳥Ⅰ・Ⅱの時期に集中し、奈良～平安時代には数例確認されるのみである。分布状況をもても飛鳥時代のものは古墳や方形周溝墓の分布と重なる状況がみられ、のちのものは条里地割線付近に存在する傾向があった。A1式は、八尾市と東大阪市にまたがる池島・福万寺遺跡においても飛鳥時代のものが見つかっており、そこでは遺構が正方位方向に並んで検出されることから、地割線上で行われた地鎮に係わるものと推定されている[江浦洋1992]。恐らく、長原遺跡の奈良～平安時代の例はこれと同様な意味をもつものであろう。では、大多数を占める飛鳥時代のものはどうであろうか。

長原遺跡において、古墳～飛鳥時代の前半にかけては顕著な洪水層は確認されていない。そのため、飛鳥時代のはじめごろは、まだ古墳の墳丘が累々と並ぶ姿がみられたはずである。その場所に水田開発をはじめたのが飛鳥Ⅰの時期である。この開発に伴って多くの古墳が壊され、そのための供養がA1式というかたちの供献埋納であったのではなかろうか。そしてまた、墳丘を破壊した際に現われた古墳時代の土器についても穴を掘ってていねいに埋納するという処置がとられていたのではないかと推測されるのである。

古代において、古墳を壊し、その改葬を行った例として、藤原京における日高山横穴群の例がある[奈良国立文化財研究所1986]。同じく藤原京の造営に伴って削平された日高山1号墳では、周溝の肩の部分に6世紀後半と7世紀初頭の土壌があり、須恵器・土師器の完形品がまとまって出土している[奈良国立文化財研究所1985]。その報文中では土壌の造られた意味について言及していないが、古墳の破壊と関係するものと思われる。また、橿原市四条古墳は藤原京造営に関連する溝によって削平を受けていたが、その際に土器を使った地鎮を行っているという[西藤清秀・林部均1990]。さらに恭仁宮においても、その造営によって破壊された古墳の周溝内からはほぼ完形の須恵器が出土した例があり、周濠を埋め

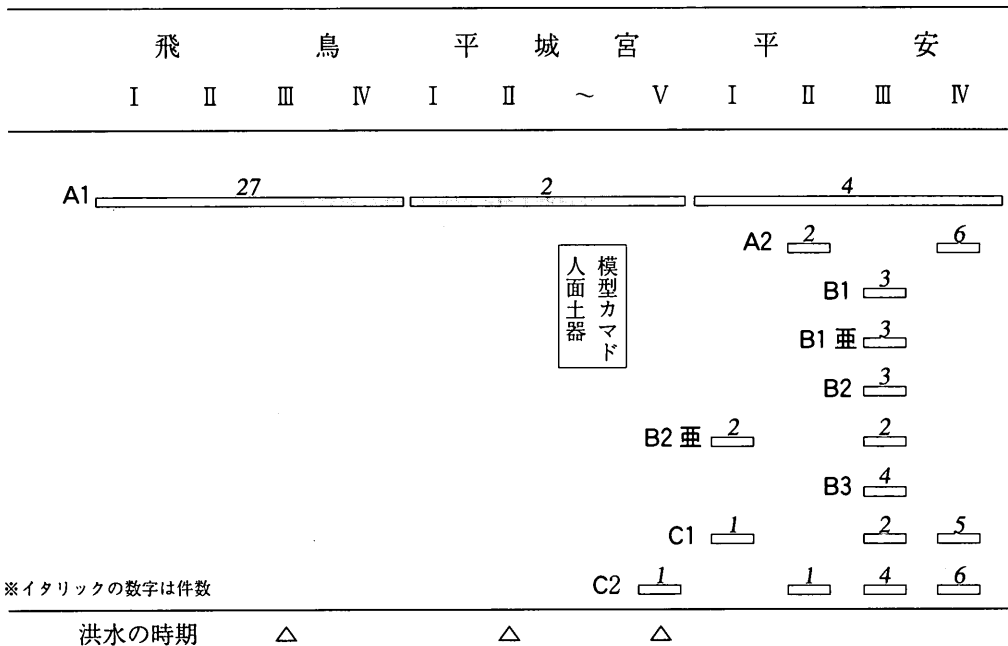


図245 土器埋納遺構の変遷

る際に安置されたものと理解されている[中谷雅治1976]。やや時期は下がるが、平安時代の例が交野市清水谷古墳群にある[水野正好1992a]。ここでは横穴式石室を開口してしまった際に、土師器皿3枚を重ねて供進していた。

史料の上でもこれに関連すると思われる次のような記事がある(註7)。
日本書紀 卷二十五 孝徳天皇(白雉元年)
「冬十月、宮の地に入るが為に丘墓を壊られ、及び遷されたる人に、物を賜うこと各差有り」

日本書紀 卷三十 持統天皇(七年)
「己巳、造京司衣縫王等に詔して、所掘戸を収めしむ」
続日本紀 卷四 元明天皇(和銅二年)
「癸巳。造平城京司に勅すらく、若し彼の墳隴、発き掘らるる者は、随つて即ち埋み斂めて露はし棄てしむること勿れ。普く祭酹を加えて以て幽魂を慰めよ」

続日本記 卷三十六 光仁天皇(宝亀十一年)
「左右京に勅すらく、今聞く、寺を造るに悉く墳墓を壊ち、その石を採り用ゐる、と。唯、鬼神を侵し驚かすのみにあらず、実にまた子孫を憂へ傷ましむ。今より以後、宜しく禁断を加ふべし」

史料から、古代人が墳墓に対し畏怖の念をもち、その破壊に際し非常に注意を払っていたことが読み取れる。また、藤原京などでの調査成果からも今回の解釈が妥当性を欠くとはいえないであろう。

長原遺跡では、飛鳥Ⅲ・Ⅳの時期にはこうした土器埋納は減少している。これは飛鳥Ⅲの時期が推定される長原 6Bii 層に係わる洪水によって開発の手がやや鈍ったことがその理由として考えられる。前述の池島・福万寺遺跡では、土師器杯の中からウリ科の種子が見つかった。長原遺跡でも 1 例ではあるが、ウリ科の種子を多数出土しているものがあり (NG91-1 次調査 SK7E13)、河内平野において共通した祭祀が行われていたことをうかがわせる。

平安時代の A1 式は 4 例を数え、その内の 3 例は付近の建物となんらかの関係をもつものと推測された。特定の建物に対する供養については [森郁夫 1984] に詳細に述べられているように、造営工事のさまざまな段階で行われていたと思われる。その中に A1 式の土器埋納を伴うものもあったと考えられる (註 8)。

A2 式は平安Ⅱに 2 例、平安Ⅳに 6 例がある。土器の出土状況は逆位や横位であって、何かを盛っていたとは考えられない。また 1 遺構からの出土点数も多く、もっとも多いもので 29 点を数える。したがって A2 式の目的として、なんらかの祭祀後に、それに使用した土器をまとめて収納したことが考えられる。土器は並べたり、重ねた状態で見つかることから、使用後に廃棄したものとはいいがたく、使用した土器をも奉獻品としていねいに埋納したのであろう。平安Ⅳになって埋納する土器の数が急激に増えるが、これはそれまで散在していた建物群が 1 個所に集中することと関連する事象ではなかろうか。すなわち、散在する各建物群単位で行われていた祭祀が、より大きな単位で実施されるようになったことを示すものであろう (註 9)。

B 類型

複数の土器をどのように容器として組合せているかによって、5 つに分類した。その中で、B1 式・B2 式はそれぞれひとつの作法として確立したものがあるかのように型にはまったものであった。また、それに類するものとして、B1 亜式・B2 亜式があり、これらは分布の上でそれぞれの範型と共通していた。B3 式は B2 式に近い分布を示しており、分布状況からみたところでは B1 式・B1 亜式と、B2 式・B2 亜式・B3 式という 2 群に分けて考えることができるだろう。

B1 式に類似するものを求めると、平城京左京 3 条 2 坊 16 坪に土師器甕を身、須恵器杯

蓋を蓋とした奈良時代の例がある[森下浩行・宮崎正裕1992]。ここでは甕内に墨が納められていたことから、胞衣壺の可能性が考えられている。長原遺跡の例では内容物の明らかになっているものはなく、胞衣壺と即断することはできない。また、長原で見つかっているものは平安Ⅲの時期のものばかりで、胞衣壺であるばあい、この時期に限定されることも考えがたい。さらに、平安京においてこの時期の胞衣壺を埋納する例がまったく見つかっていないことからB1式を胞衣壺とするには消極的にならざるをえない(註10)。もう一度分布状況にもどってみると、建物群の範囲の外周、屋敷地を巡る溝の外側といった地点で出土していた。このことから地鎮・鎮宅を目的としたものではないかと思われる。

神戸市の2遺跡には9世紀末から11世紀にかけての遺構にB1式あるいはB1垂式と呼べるものがあり、ここでは地鎮遺構と報告されている。まず、住吉宮町遺跡ではSX01・04という土師器小壺や須恵器壺を身とするものがあり、それぞれ掘立柱建物の東南隅に当たる場所を選んで埋納していることから、地鎮に関係する遺構と考えられている[神戸市教育委員会1990]。また、日暮遺跡では地鎮遺構として6例あり、その中に土師器甕を正位に用いる例が2例含まれている。これらは建物群の周囲に分布しており、中には銭貨や粟またはヒエを埋納するものもあった[神戸市教育委員会1989]。

さらに『延喜式』陰陽寮の記事には、新年のはじめに、「害気消除、人無疾病、五穀成熟、築二七杵」の呪を読み、「缶」などの鎮物を深さ三尺の穴に納める行事があったことが知られる[村山修一1981p.99]。『延喜式』は延長5(927)年に撰進されており、平安Ⅲの時期とも大きくかけ離れるものではない。8世紀末頃に発生した大洪水ののち、長原地域の開発はやや停滞ぎみであった。そこに再び積極的な開発が及ぶのが平安Ⅲの時期である。B1式およびB1垂式はこうした背景のもとに執り行われた地鎮・鎮宅を目的とした土器の埋設と考えることができよう(註11)。内容物については、土器を正位に置くことから五穀粥・酒などが想像される。

B2式は住吉区南住吉遺跡においても1基確認されている(MN86-40次調査)。ここでは甕内から骨片や炭が見つかっており、火葬墓と考えられている。これも長原遺跡の例と同様に平安Ⅲのものである。B3式と同様に甕を正位に置くものが、富田林市甲田南遺跡から数基発見されており、甕内部に銭貨を入れた土師器皿を正位に置いていることから、火葬墓と考えられている[大阪府教育委員会1981]。長原の土器編年に照らすと平安Ⅱ・Ⅲに当たる時期のものである。奈良市薬師寺西遺跡ではピット内に土師器甕を正置し、その中に須恵器壺を納めた平安時代後半期の例が報告されており、骨片も見つかっている[寺沢薫

1989]。これらの事例から、B2式は火葬墓、B3式についてもその中には火葬墓が含まれていると考えることができる(註12)。B2式と近接してみられたB2亜式についても火葬墓の可能性があろう。そして、身の中に納められた土師器小皿は死者に対し供献されたものと理解される。

B2式・B2亜式は身となる土器をともに伏せて使っていたが、水野正好氏によれば、『兵範記』仁安2(1167)年7月27日の条から、一つの約束事として骨櫃や墓誌といったものをうつ伏せにするということが行われていたという[水野正好1985 p.295]。

C類型

C1式は土壙などの一隅に土器を埋納するもので、その状況から、土壙は土器を埋めるためだけに掘られたものではない。また、土壙の平面形は隅丸長方形や楕円形を呈するものが多く、底面が広く、かつ平坦に掘られていた。こうした特徴から土壙墓である可能性が高い。府下では高槻市宮田遺跡[原口正三1982]・藤井寺市津堂遺跡[大阪府教育委員会1987]・堺市日置荘遺跡[大阪府教育委員会・大阪文化財センター1988]などで、このような土器埋納土壙から人骨が検出されている。特に宮田遺跡では、土壙墓が屋敷の北東に見つかっており、屋敷の守護者としてこの場所に葬られたことが推測されている。長原遺跡でもC1式と隣接する建物との関連が指摘されている例がいくつかあり、宮田遺跡と同様に屋敷墓と考えられるかもしれない。そのばあい、埋納された土器は供献されたものと理解できる(註13)。

C1式に分類した[大阪市文化財協会1989]のSX401では、浅い土壙の内部から人骨と思われる骨片が出土していたが、焼けた板材なども散乱していた。このような状況から、この遺構については墓と考えるよりも周辺で火葬を行ったことを示すものであろう。

C2式は井戸への供献を目的としたものである。多くは碗や皿が用いられており、土壙墓と推定したC1式と共通する点が興味深い。井戸の廃絶という行為に人間の死と共通の観念がはたらいていたのであろうか。しかし、井戸への土器埋納については、以下のようなケースもあり、埋納行為を廃絶時に限定できない。

[大阪市文化財協会1992c]の南Ⅱ区SE001では頭部や脚部を欠損した土馬を伴っていた。[水野正好1985 p.302]にあるように、こうした土馬は疫神乗騎の損壊をねらったもので、井戸の廃絶時だけでなく使用期間内にも土器の供献が行われていた可能性を示している。高槻市嶋上郡衛跡では10世紀の井戸から「北方土公水神王」などと墨書された土師器皿が見つかっており[高槻市教育委員会1981]、これを水野正好氏は井戸水の濁りや涸渇に係わるま

じなび世界を表現しているものと考えている[水野正好1985 pp.308-309]。また、和泉市池田寺遺跡の9～10世紀の井戸267-OWでは、須恵器の壺や鉢、黒色土器の杯などが数回にわたって埋納されている状況がみられた[大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1989]。こうしたことから、井戸における土器埋納は使用時か廃絶時かを明確にした上でないと、その意味を誤って解釈することにもなりかねない。井戸への土器供献といっても、意図されたところは一様ではないであろう。

5) まとめ

土器を埋納する行為には、土器を廃棄したり、また土器を井戸側などに転用するばあいと違って、行為者の思想が込められている。何者かへの供献品として、供献品を納める容器として、または棺として土器は埋納されてきた。

飛鳥時代の初頭、地鎮のためにさかんに土器埋納が行われた。それは、それ以前にあった古墳を水田開発のために破壊することへの代償であったと思われる。その後、奈良時代末の洪水によって、水田は完全に埋没する(註14)。しかし、平安Ⅰの時期から徐々に再開発が進められ、平安Ⅲの時期には建物群をはじめとする遺構が激増する。この時期、土器埋納遺構も急激に増え、B1式・B2式といった定式化した作法の存在をうかがわせるものがみられるようになる。B1式は飛鳥時代にみられたA1式に代る新たな地鎮の方法なのであろう。B2式をはじめ、B2亜式・B3式は火葬墓と考えられるが、これらが続く平安Ⅳの時期にはみられなくなる。平安Ⅳの時期、長原遺跡の屋敷地の状況は一変し、建物群が散村的に存在する姿から、集村化を示すようになる。建物群ごとの小単位で行われていたA2式という土器埋納も、この時期からより大きな単位で行われるようになる。また、建物に近接した場所に設けられていた土壙墓と考えられるC1式も、屋敷地から離れた特定の場所に集められる傾向が現われる。ここに居住者を取巻く社会の枠組みの変化がうかがえるように思う。

これまで土器埋納遺構といえば、性格不明の遺構として扱われることもあったが、分類基準を設け、それを歴史の変遷の中で位置づけ、広く類例を求めていくことで明らかになってくることも多い。特に過去の人々の思想に関係する部分を復元する上で重要な意味をもつものであるといえよう。

(櫻井)

註)

- (1) ヨーロッパ先史考古学における埋納(デポ)の概念について整理した佐原真氏は、埋納とは、遺物の単数・複数は問わず、「意識的に遺物を埋め納めること、その遺跡、遺物。墓への副葬は除く」とする[佐原真 1985 p.541]。佐原氏の提唱に従うならば、墓に副葬された土器を埋納遺物とは呼べないが、墓と断定困難なばあいや、墓かどうかを再検討すべき遺構について考えるには土墳墓や火葬墓とされているものも同様に見ていく必要がある。よって本論では墓も扱う。
- (2) [大阪市文化財協会1983]で土器埋納ピットとされるピット409では、直径1.0m、深さ0.6mの掘形の底に、底部を欠いた羽釜が正位で置かれていた。こうした状況からこの羽釜は井戸側と考えられ、今回の検討から除いた。
- (3) [佐原真1985]ではゴールドン=チャイルドが『青銅器時代』(1930年)で示した「埋納(hoards)」に関する記述が抜粋されている。それによると埋納遺物の種類として「家財の埋納」・「供献の埋納」・「商人の埋納」・「鋳物師の埋納」があるとされる。「供献の埋納」を除く他の事例は貯蔵を目的としたものと考えられる。「供献の埋納」の中には岩の下、木の下、泉や沼の中でまとまって見出し出される遺物があるとされる。泉や沼においては、遺物を埋めたとは表現しにくい、人為的に埋められたばあいと同様に、泉に沈めることによって人の手に触れない状態になることから、ここではそれらも含めて埋納と捉える。
- (4) [佐藤隆1992]に基づく「平安時代Ⅰ期～Ⅳ期」の名称は、以下「平安Ⅰ～Ⅳ」と省略して用いる。
- (5) 図241～244の中で一点鎖線で示すものが推定条里線である。推定条里の位置については[木原克司1982]を参照した。
- (6) 古墳時代の土器を埋納する遺構にはA1式とはやや形態の異なるものもある。それは[大阪文化財センター1986]SP01、[長原遺跡調査会1978]土墳Ⅰなどで、楕円形または隅丸方形の掘形に多数の須恵器を並べ、あるいは積み重ねて埋納するものである。これらは、同時期の土器がまとまっていることから古墳時代の遺構とみてまちがいがなく、長原遺跡東南地区以外にも分布している。
- (7) 史料の読み下し文の出典は[黒板勝美1932 p.251・p.435]、[林陸朗1986 p.84・1988 p.24]である。
- (8) 住吉区山之内遺跡の古墳時代の掘立柱建物に、須恵器の完形品を数点埋納した柱穴が見つかった例もある(YM83-41次調査)。
- (9) 喜連東遺跡(KR92-3次調査)では平安時代後期～鎌倉時代に属する土器埋納遺構があり、土師器小皿を十数枚埋納していた。また鎌倉～室町時代に当る例が住吉区山之内遺跡で検出されている(YM92-8次調査、SP03)。ここでは小規模なピット内に土師器小皿ばかりを19枚埋納していた。
- (10) 平安京の土器埋納遺構については久世康博氏の研究がある[久世康博1990]。その中で、10世紀の例として右京1条3坊9町のSK94・131に土師器甕を正位に使い、それに黒色土器鉢で蓋をする事例が示されている。これらは今回の分類のB1亜式に含めてよいと思われる。久世氏はこれらを地鎮に関係する遺構と考えている。また、[原秀樹1991]には長岡京右京で行った調査で、平安時代創建と伝えられる勝龍寺に関連するとみられる遺構が報告されている。その中のSX34は長原遺跡のB1式と共通点が多い。SX34からは延喜通寶が2枚出土しており、地鎮供養の跡と考えられている。
- (11) 難波宮下層遺跡において、B1亜式に該当する7世紀前半の例が見つまっている。遺構の直径は40cm強、土師器甕を正置し、その上に土師器杯を入れ子に使用して蓋としている。甕の中に炭や灰はなかつ

たと報告されている[大阪市文化財協会1992d p.53]。なお、本文中では陰陽道に関する史料を示したが、[水野正好1992b]には、橘家神道地鎮祭に土や葉を土器に納めて鎮物とする事例があることのほか、仏教の安祥寺流に伝わる地鎮の作法などが紹介されている。B1式のような土器埋納が仏教に関連するものであれば、末法思想との係わりを考える必要があるだろう。末法に入ると信じられた永承7(1052)年は平安Ⅲの新段階に当る。各地で経塚が築造されるのもこのころである。

- (12) B2式・B3式に類似するものが奈良県平群町から三郷町の高安城跡にもあり、火葬墓と考えられている。ここでは奈良～平安時代の多数の蔵骨器がまとめて検出されている[河上邦彦1983]。身として使われる土器には土師器壺のほか須恵器壺・横瓶や灰釉陶器がある。
- (13) [江浦洋1988]では、12～14世紀を前後する時期の土墳墓における土器の埋納形態の分析が行われている。
- (14) この洪水層は長原5層と呼ばれているもので、同層内からは人面墨書土器・模型カマドといった平城京などで大祓に使われていたものが出土する。こうした都城における祭祀を、長原の居住者がいち早く受容し、執り行っていることに注目したい。土器埋納に係わる思想的な背景も、本来は都に原型があって、それが伝播したものと推測する。